

鏡花の方法

—地図のことなど—

丸尾 壽 郎

でかゝって全国の地図が作成された(たゞし千島・北海道は未発行)。因みに「富山図幅」は明治二十二年、「高山図幅」は翌二十三年に完成している。

そこで『高野聖』の旅僧宗朝が持っている「参謀本部の絵図面」だが、これは「表紙を附けた折本になつてゐる」し、「描いてある道」は「赤い筋が引つ張てある」というしろものである。輯製二十万分之一地図はもちろん参謀本部の地図はすべて白黒のシートで、日本地図センターの大森八四郎氏の御教示によれば表紙附きの折本でも多色刷りでもない。これは『劔岳』が「明治二十年測量局は二十万分之一の地図を公開し、民間人による依託販売を許可して」いたと記しているように、当時、川流堂小林又七が複製販売したから、中には二色刷り、折本というのもあつたかも知れぬが不明である。

『高野聖』の時間構造が二重三重の重層構造をもち、それが作品の日常的現実から非現実世界へ異界への溶化の装置となつてゐるとは、すでに笠原伸夫・東郷克美氏らの論考に詳しい。『高野聖』は、「年配四十五六」の宗朝が「年紀の若」い頃の「飛驒越」えの体験を敦賀に帰省する私に語るわけだが、か

『高野聖』の冒頭に、「参謀本部編纂の地図」のことが出てくる。前田愛氏は『栗の穂の上へ赤い筋が引つ張てある』この地図は、ケバ図法で地貌を表現した輯製二〇万分之一地図であるべきで、(中略)伊能図を原図として明治十九年から製作されはじめた地図である。」と言われる。(泉鏡花『高野聖』—旅人のものがたり—)

大略はその通りで、「経度一度、緯度四〇分ごとの図面に区切られた、明治初期のわが国の代表的な地図」である(織田武雄『地図の歴史』が二、三問題がある。

日本の近代における組織的な地形の測量は、明治四年に工部省に測量司が置かれ、そこで三角測量法で実施して以来のものである。一方、地図の編成は兵部省参謀局が間諜隊というのを設けて、そこが掌っていた。測

量司は明治六年に内務省が設置されるとその業務とともに移管され、内務省所属となつた。兵部省は明治五年に廃されて陸・海軍省となり十一年にその参謀局が参謀本部となつて、ここにも地図課、測量課が設置された。野戦目的の地図製作で三角測量に基礎を置かず、経・緯度を欠いた応急の地図で二万分之一の「迅速測図」(関東地方)「仮勢地形図」(近畿地方)が作られる。新田次郎が小説『劔岳(点の記)』で拙速主義と批判したそれである。内務省の三角測量業務がそっくり

陸軍参謀本部測地局に移管されるのは明治十七年、測地局が陸地測量部となるのは明治二十一年である。「輯製二十万分之一地形図」は、こうしたいきさつの中で伊能図や天保国絵図および明治八年の太政官達で集めた各府県の資料をもとに明治十七年から二十六年ま

りにその時二十歳としても『高野聖』の發表された明治三十三年から二十五年前に、「地図を繰り開いて見た」とすると、輯製二十万分の一の「高山図幅」は出現していないことになる。地図に年齢を合わせると、「若い」だの「和僧には叔母さん位な年紀ですよ」という山家のおんなの言葉はおかしなものになつてしまふ。ここには、異化された現実すらが虚構化され、あるべきものとあるべからざるものが、一虚実が混然として醜化され、なまぜられた疑似的現実が、さりげなく提出されていると見るべきであらう。

同じことは空間構造にも言えそうである。

「飛驒から信州へ越える」道筋で「天生峠」は方角がちがうと言われる。それは「虚構空間に誘うための操作」（東郷氏）として、異論のないところである。明治四十四年刊の『飛驒山川』によると「天生峠」は「未だ改修を経ざるを以て險難言語に絶すと雖も而も里程に於て大に近し。……（白川）荻町を出で、十数丁登れば路傍に一瀑あり高さ六間之を木瀑といふ：次に中之瀑、高九間、次に高瀑、高八間と称す、漸くにして山頂に達す：路は巨木森々として昼尚ほ暗き処を過ぐるものにして荻町より郡界まで一里四丁を算せ

り。降路は勾配頗る急にして加ふるに崎嶇突兀、行旅屢々道を失はんとす」云々とある。内天生から角川へ出て右にとって真直ぐに古川・国府・高山を経て久々野から益田川沿いに黒川渡、高根村を抜けて野麦峠を越えれば信州諏訪に出る。富山側からの、飛驒越え信州への本道である。「矢張信州へ出ます。先は一つで七里ばかり総体に近うござりませぬ。」という百姓の言葉にも、異界の二つの滝にも重りそうだ。「天生峠」の蛇・蛭の怪異もしのばれる、恐しい山中の道である。

宗朝は、場所不明の「先の泊」を午前三時の朝発ちをして六里を歩いて「辻などといふ村」に入っている。天生峠に入る手前の、茶店に出るまでに位置する村で「可恐しい悪い病が流行つて：村はから一面に石灰だらけ」だとある。作品の外在的な社会的事実からすれば、この疫病は明治十年、十二年、十五年、十八、九年および二十三年、二十八年のコレラ、二十六年、二十九年の赤痢・天然痘・腸チフスの各地での発生が考えられる。「天生峠」の当時の状況とともに、「高山図幅」の完成を視野に入れば当時の小説読者の印象に新しい生活現実である。が、そこに

も仕掛けられた非現実の現実―あるいは村の異化の問題がある。「辻」は高山市の南、朝日村の美女峠の南麓に現存するし、また富山県立山町にも江戸期から存在し、明治二十二年までは村、以後は大字名となって現在に至っている。いずれも一枚の地図の南と北に敵然と位置している。それが前者は作品世界では地理的に路順が逆転する位置関係にあり、後者はここからでは白川村には入れない虚妄性をもちながら、まさに天生峠の入口にある村落としてその虚像を投影させて、―異界への入口―読者の想像力の世界に調和的なひとつの風景をつくり出している。

『高野聖』の作品構造は、現実・非現実の時空間の重層性あるいは入れ子構造をもち、それが異界への溶化の心情的装置として機能化しているというだけでなく、日常的現実と目される参謀本部の地図や天生峠、辻村や疫病という外在的事実が、実は異化の潜在的契機として形成されながらも醜化され虚構化されて、擬似的な現実とされているという、形象上の複合的構造があるのではないか。「作中の事実が所謂事実でなくともよい」と言う鏡花の創作理論の方法化が、ここに見られる。